

岩崎 純一 著

『岩崎純一全集』 第四十一卷「社会科学（二の一）」

個人・自然人と国家内人間集団・共同体（結社、民法上の組合、任意
団体、法人および権利能力）

編纂、監修 岩崎純一学術研究所『岩崎純一全集』編纂局

巻頭言

本巻は、『岩崎純一全集』の第四十一巻を成し、岩崎の言語の著作物のうち、個人・自然人と国家内人間集団・共同体（結社、民法上の組合、任意団体、法人および権利能力）に関する述作を収める。

目次

巻頭言

第一編 〇歳～十九歳

第二編 二十歳～二十九歳

共感覚者の自助グループ活動について

第三編 三十歳～三十九歳

第四編 四十歳～四十九歳

第五編 五十歳～五十九歳

第六編 六十歳～六十九歳

第七編 七十歳以降

第八編 著作者の一部および著作者が岩崎純一であるもの

第九編 著作者が岩崎純一であるもの

編纂中。収録を待たれよ。

共感覚者の自助グループ活動について

二〇〇七年十二月七日 起筆、攔筆、公開

虹色協奏曲 BBSさん(<http://www.hidebbs.net/bbs/mamesynes>)で、「共感覚者同士で自助グループを作るとしたら、実現するか否かにかかわらず、こういうものがよいか」という提案が出ていて、興味深いです。

今までも公にはしていないし、今後も一切公にするつもりはないですが、実は僕はすでに、何人かの都内と近辺の共感覚者に呼びかけて、共感覚者の集いをやっています。発起人は僕ですが、私的なもので、幹事役に当たる人が毎回いるくらいで、リーダーは決めていません。僕以外は、女性メンバーです。

無理に規模を広げるつもりもないですが、「せっかくここまでブログを書いているのだから、純一さんが呼びかけて共感覚者の会合をやってみてどうか。」といったメールで聞かれながら、やっていないと嘘を言うわけにもいかないですから、やっている事実だけは答えています。ただし、ネット上で出会った共感覚者全てに声をかけた

わけではなく、声をかけたいと思った方のみに声をかけた結果として、今があります。正直を言うと、厳選と言ってよいです。目的は、むしろ、人と人との関係の温かさを保つためのものです。メールが来るたびに、「純一さん、集いをやって下さい。」「もうやっています。」「のやり取りばかりするのも不自然だし、よくない気がして、こうして一度ここに書いてみました。逆に、僕が連絡先を知らない方で、お会いしたい共感覚者が何人かいるのが、少々残念ではあります。今はその方々を含めて一度集うのが、目標です。」

ただし、「純一さんが中心となって、何か大掛かりなことをやって下さい。」「純一さんのブログを中心に、他の共感覚者が集まれるような場をネット上に作って見たらどうですか?」という要求に答えるのは、何とも恐れ多いことでありますし、それはこのブログの求めるところと、僕という人物の能力と性質上、無理な話でしょう……。と、一人で苦笑する日々です。

共感覚者の自助グループ。それは確かに、ここ数年来の僕の夢でもあります。「もし、自助グループを作るとしたら、どういうものを求めますか?」との問いがあつたので、思い切つて僕の夢と理想をあえて述べてみます。

今のところ、僕が思い描いている夢を含めて、あつたらいいと思う

共感覚グループ活動形態は、大まかに言って三つあるのです。三つに分けたほうがよいという意味でもあります。一つは、きっと虹色BBSの方々と、一般の共感覚者、主婦の方々までもが参加できる、重々しくない、安心感を得られるような場を設ける意図での、グループ活動です。これはこれで、日本にいくつかあったほうが、よいに決まっていると思います。

気軽とは言っても、僕は共感覚グループに、娯楽性は求めません。皆で集まることの楽しさはあってもよいけれども、文化的・学芸的活動を望みたいのです。最低でも、定期的な皆でどこかに出かけて、文化的・学芸的な語り合いをしたいものです。欲を言えば、皆で桜を見るなり、紅葉を見るなりして、共感覚を使ってそれらを題材に作曲したり、絵を描いたり、和歌を詠んだりする機会を持つ。例えば主婦の方なら、共感覚を使った裁縫でも何でもよいと思います。ただし、こうなると、大人数になるほど難しいし、リーダーがいまいことが逆に災いして、バラバラになる恐れがあります。それに、文化学的研究と言うよりは、日常の悩み相談などが中心にならざるを得ないと思います。でも、これがきつと皆さんの求めるところだと思し、僕も賛成ではありません。

それとは別に、僕自身の夢もあります。実は発想を大転換して、いわゆる気軽な共感覚グループとは別に、あえて共感覚者の男ばかり

定員「∞」人ほどで、徹底した会員制と会則の明文化、「共感覚文化宣言」をやって、れっきとした文化集団ができないかと考えたことがあります。僕は芸術ならほぼ何でも好きですが、西洋絵画の理想の一つであるラファエロ前派兄弟団と、象徴主義宣言に倣ったこととです。まあ、それはちよつと難しい、思想・イデオロギー的な話になります。とにかく今は挫折しています。普段読んでいる哲学書なり芸術書なり、自分が心救われた本などを持ち寄って、語り合う。定期的に課題をメンバーに課して、作曲をしたり、絵画を描いたり、和歌を詠んだり、書をやったりして作品を作り、ただし費用は自己負担で、自分の共感覚の具体例や説明文を書いた文章の提出を義務付けて、メンバー同士で議論する。日本語・日本各地の方言を研究・探索して、国内の共感覚の多様性を追求する。世界の言語と少数民族の実態、仏教やアニミズムにまで目を向けて、共感覚の多様性と、日本固有の共感覚を研究する。メンバーは全て、ネット上での文章化（ブログ等）なり、論文なり、書籍化なり、何らかの形で成果を残す。脳科学的見地からではなく、純粋な共感覚文化集団として活動する。

これは今でも僕の理想的な夢です。でも、よく考えたら、それを独りでやっているのが、このブログだなという気がします。そもそも、理想的な共感覚グループを構想しかけて、色々と話を出してみても、ああ、ここから先は無理だな、僕しか求めていない領域もあるんだなと直観したから、ブログをやっているのかもしれないという思い

もありませんね。色々と寂しい思いもあります。それに、こんな強固で閉鎖的なことを掲げたら、今度は主婦の方などが全く参加できなくなりませんか。かと言って、不特定多数に向けたグループ活動に入れば、少なくともこのブログでやっているようなこと、独りだからこそ人生をかけて追求できる共感覚の深さは、少なからず捨てることになると思います。その覚悟は、僕にはありません。すでに集い

をやっている身ながら、失礼な言い方ですが。

例えば、11/26の記事のようなことは、正直なところ、共感覚者である以前に、共感覚者本人に情熱がなければできないことだと思えます。しかし、その情熱が、本来の「共感覚者と呼んでよい共感覚者」のあり方ではないかとも思います。結局は、一人でひたすら調べていくしかありません。そこにグループなる概念はないわけです。共感覚研究は、最後は孤独な執念なのだと、つくづく思います。ただし、そういった情熱や執念や人生全体にかかわる研究という発想にするなら、極めて限られた、堅い人間関係は揺るぎないものがありますが、逆に共感覚者の主婦の方々が決して参加できない空間になっってしまうでしょうね。こうなると、虹色BBSさんで出ているようなグループの発想からはかけ離れます。

もし何か大掛かりな活動としての「共感覚者自助団体」を考えておられる方がいるとすれば、それはそれでNPO的な発想で進めて、む

しろ社会全体、世の子どもたちに成果を還元するのなら、すばらしいと思います。これが第三のグループ活動の形でしょう。和気藹々とした気軽さと安心感を願う集まりでも、閉鎖的な芸術志向集団でもない、社会への還元を目的とした共感覚団体。ただし、それを担うのは、おそらくは共感覚者の主婦でもなく、子どもでもなく、友人同士でもなく、今後も研究者の手に委ねられるだろうと思います。それができる環境と社会的地位にある人でなければ、どうにも仕方のないことですからね。けれども、僕の場合、すでにスタートの時点で、それとは違ったスタンスで共感覚と向き合うために、そもそもこのブログを作ったのです。ブログとグループ活動とは、ベクトルが別だという意識は、今もあります。言い換えれば、研究者にとつては、科学的な研究の邪魔になるようなことが、僕にとつては重要な発想なり文化活動だったり、人生の根本だったりするから、難しいのです。

言い換えれば、たった一人でも、「この人は本当に真摯な共感覚者である」と思える人に出会えて会話が進めば、それはすでにグループなのだと思えます。そうすれば、共感覚が世に広まるスピードはぐんと落ちる代わりに、揺るぎない豊かな人間関係が生まれるでしょう。ただし、こうなると、むしろ重々しさのない、気軽に不特定多数の人間が集まれる自助団体という希望をお持ちの方々にはそぐわないかもしれない。逆に、個人個人の人間関係を犠牲にすれば、不特定多数の人に共感覚を知ってもらうことはできませんが、それ以上

のものは犠牲になるかもしれない。最初からあえて事務的なことだけに終始するコミュニティー・センターとしてのみ機能する自助グループを作るのであれば、むしろ長続きする可能性が増えるような気がします。そこに最終的な深さや安心感はなくてよいのであって、その深さや安心感は、共感覚に理解のある友人・恋人・家族・・・少人数規模での集いでのみ得られること。基盤はそこにあると思っています。

グループという概念それ自体に、どうしても個人個人の人間関係を多少なりとも犠牲にしてしまうような、そういった傾向があることは否めないと思います。最初からそれを覚悟しておかないと、良かれと思って活動を始めた我々共感覚者自身が、また傷つくことになるのではないかと、僕はその点を憂慮します。

僕たち共感覚者が、集団で何かをするのであれば、いわば感性の同志として、一生の記念と人の心に残る、温かい文化活動をしなければならぬと思います。そういう活動ができる日がいつか来ることを願っています。